



Title	<紹介>蜂矢真郷著『古代語の謎を解く II』
Author(s)	石村, 小春
Citation	語文. 2017, 109, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蜂矢真郷著『古代語の謎を解く』

四 トマル「止」・トドマル「留」

五 モミチ「黄葉・紅葉」とカヘルテ「楓」

第二章 一 音節の語構成要素

石村小春

一 マ「真」とモ「最」

二 カ「処」・ク「處」・コ「處」

三 シ「風」とイ「息」

第三章 現代語に統く形容詞など

一 ヒロシ

二 フトシ

三 ウマシ

四 アハレ

あとがき

本書は一〇一〇年に刊行された『古代語の謎を解く』（大阪大学出版会）の続編となるものであり、前書刊行以降、蜂矢氏が進めてこられた研究の最新の成果をまとめた一冊となつてゐる。

現代日本において生活している我々にとって、日本語とは日常的に触れる身近な存在である。本書は現代我々が使用する日本語から大きく遡り、古代日本語（とくに上代語）におけることばの一つ一つの語構成や意味、用法がどのようなものであったのかと、いう謎に迫ろうとするものである。また音や形、意味などの類似するいくつかのことばを取り上げつつ、それらがどのような関係性をもつてゐるのか、あるいは現代において我々が用いていることばへとどのように繋がつてくるのかというところを明らかにしようとするものである。

まず、本書の内容について、目次に沿つて以下に示す。

はしがき

第一章 現代語に統く類義語

- 一 ツマ「妻・夫」とトモ「友・伴」
- 二 ヒ「日」・ヨ「夜」、アサ「朝」・ユフ「夕」
- 三 モドル「戻・恨」とマダラ「斑」

蜂矢氏は本書第一章「現代語に統く類義語」冒頭において、「類義語は、両者が対比的にとらえられる語でもあり、対比するということは、両者の性格を明らかにしようとするのに、最も基礎的な方法であると言えよう。」(p.14) と述べているが、この「対比」という姿勢・手法は本書全体の謎解きの鍵となつてゐる。この「対比」をもとに、各章のテーマについてそれぞれ母音交替や上代特殊仮名遣、アクセント等の観点から、古代日本語においてそれぞれのようなことばであったのか、どのように構成された語であつたのかという謎について、一つ一つ解き明かしてゐる。また、現代日本語へとどのように連続し、あるいはどのような変

遷を遂げていくのかという点についても言及している。

また第三章では形容詞について取り上げているが、このテーマについては前書『古代語の謎を解く』では取り上げられなかつたものであり、蜂矢氏の新たな見解が示されている。

本書の大きな特徴として、全体を通じて非常に分かりやすく、また広い読者層を想定した細かな心配りがみられるという点が挙げられる。

本書「はしがき」には、「古代語に関心を持つ者として、古代語について興味を持つてほしい、これまでよりさらに持つてほしいと願う思いを込めて、現時点での最新の研究の一端を、中にはやや難しいこともあるではあるが、専門的なことをできるだけわかりやすく書くことに留意しつつ、一冊の本の形に表すことにした。ここに書いたことは、古代語についての言わば断片であるが、それらの背後にある大きな問題とそのおもしろさに、少しでも多くの読者が近づいて貰えることを願うものである。」(p.) という蜂矢氏の思いが述べられている。本書が日本語研究に携わる者にとって、大いに得るところがあるということは言うまでもないが、これから国語学研究を目指そうとする学生や、あるいは研究としてだけではなく、日本語に対し興味をもつ広い読者層をも想定し、丁寧かつ分かりやすく古代日本語について説いている。

また、本書も前書同様、「はしがき」において「上代特殊仮名

遣」「有坂・池上法則」「被覆形—露出形」「金田一法則」「古辞書」等、本書を読み解く上で必要な知識については予め一つずつ解説を行つてある。さらに、本書中においても議論が複雑な場面では「〔はしがき〕参照」と示し、全ての読者を置いていくことなく最後まで古代語の世界へと導いてくれる。

さらに、本書では章として立てられることはなかつたが、前書に引き続き地名についての言及がしばしば見られる。脚注に至るまでいくつもの興味深い指摘が見られ、多くの読者が本書を細部まで楽しむことができるのではないだろうか。

こうした本書の端々から「古代語について興味を持つてほしい」という蜂矢氏の想いの強さが伝わってくるのである。

現代日本語だけを見ていては気付くことのできない様々な問題について、蜂矢氏とともに解き明かしていくうちに、気付けば我々読者も日本語の孕んでいる謎、またそれらを紐解く面白さに引き込まれているのではないだろうか。

日本語に興味を持つ全ての人々に、臆することなく謎多き古代語の世界へ足を踏み入れてほしい。

(大阪大学出版会、二〇一七年三月、二六八頁、一一〇〇円+税)